

■第2章 立花（りっか）■

常総型（じょうそうがた）石枕を特徴づける要素の1つが、石枕に付属する立花です。

ただ、立花の方が早く現れて、遅れて出現した常総型石枕と結びつきました。

また、常総型石枕だけが出土した古墳があるので、木製の立花もあったのではないかと考えられています。

現状で最古の石製立花は、逆さまの勾玉（まがたま）が2つ表現された、茨城県常陸鏡塚（ひたちかがみづか）古墳の出土品です。

この立花の祖型（そけい）が、奈良県富雄丸山（とみおまるやま）古墳で出土した、勾玉を4つ表現する琴柱型（ことじがた）石製品と考えられています。

この2古墳は、副葬された石製模造品がよく似ており、富雄丸山古墳の石製模造品をお手本として、常陸鏡塚古墳の石製模造品が作られたと考えられています。

また、石製立花が逆さまの勾玉を表現していることに注目すると、奈良県赤土山（あかつちやま）古墳で出土した、逆さまの勾玉を表現した琴柱型石製品も祖型の候補に挙げることができます。

琴柱形石製品は、古墳時代前期を代表する石製品の一種で、儀礼で使う木製の杖、儀杖（ぎじょう）を小型化したものと考えられています。

形状の上では、儀仗から琴柱型石製品、琴柱型石製品から立花、という変遷が推定されていますが、役割や用途がそのまま、立花に引き継がれているのかも含めて、立花の成立や、石枕に立てるようになった背景について、研究が続けられています。